日本語における節音調の意味と機能について

On the Meaning and the Function of Clause Intonation in Japanese

角　岡　賢　一
KADOOKA Ken-Ichi

ABSTRACT:

In this paper, the function of the clause intonation system in Japanese is analyzed within the framework of Systemic Functional Linguistics. In this framework, the meaning of utterances is analyzed into three Metafunctions: Ideational, Interpersonal, and Textual. Another classification concerned with meaning is made in Strata: Semantics, Lexicogrammar, Phonology, and Phonetics. The analysis will be made combining Metafunction and Strata.

KEYWORDS:

［選択体系機能言語学］Systemic Functional Linguistics・［節音調］clause intonation
［語アクセント］word accent・［メタ機能］Metafunction・［層］Strata

1．はじめに

この小論では、日本語の節音調が選択体系機能文法の枠組み（以下、「選択体系理論」と呼ぶ）でどのように分析されるかを考察する。枠組みには、選択体系理論のメタ機能と層を用いる。メタ機能は発話の表す意味機能を、観念構成・対人的・テクスト形成に三分割する。層は意味・語彙文法・音韻・音声に四分割する。選択体系理論の詳細は、Halliday（1985, 1994）などに説明されている。

日本語は声調言語ではなく高低による語アクセント体系を持つ。以下の分析では、語アクセント体系の言語は節音調と共存できると仮定している。日本語の音節構造は非常に単純で、次のように表示することができる。

(1)　　(C) V (V/G/N/C)　　C：子音、V：母音、G：出渡り音、N：鼻音

音節の中心となる母音を挟んで、前後にはいずれも任意の一要素が立つのみである。この任意要素がなければ、最も単純な音節は母音のみで構成される。語頭に子音が立つ音節構造と合わせて、日本語は開音節が無標である。音節末に出渡り音が立てば二重母音、鼻音または阻碍音

が立てば閉音節である。[1] Kadooka（1997）によると、「シェ、チェ、ツァ、ツェ、ツォ」など最近に西洋語から借入した外来音を含めた開音節は110ある。これら開音節に、二拍目が種々変化することによって以下のような変種が生じる（59－60ページ）。

(2)	CVV	（長母音と二重母音）	109通り
	CVN	（鼻音）	97通り
	CVC	（阻碍音）	335通り[2]
	CVVN	（三拍の超重音節）	75通り
	CVVt	（三拍、「っ」で終わる）	43通り
	合計		769通り

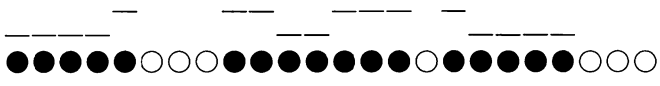
この769通りというのは、三拍の超重音節まで含んだ最大限の集計である。三拍の超重音節となると、二音節に分節する分析もあり得る。ここではこれ以上、立ち入らないこととする。いずれにしても、日本語における音節の種類は数百程度と見積もられる。英語の音節構造と比較してみると、母音と子音の音素が日本語に比べて格段に多いことに加えて語頭に三つまでと語末に四つまでの子音連続を許す複雑さには及ぶべくもない。

次に、日本語のリズムについて検証しておく。英語のリズムは強弱アクセントによって成立する脚が基本である。日本語はアクセントが強弱ではないことによって、節単位でのリズム構造も英語と大きく異なる。しかしながら、語と節の中間に位置する単位として脚を設定しておくのが妥当であろう。音調域境界の間隔より短い沈黙時間を脚境界と定義する。以下での表記は英語に倣って、音調域境界を二重スラッシュ（//）、脚境界を一重スラッシュ（/）で表示する。

ここで、日本語において節音調が具現される単位について考察する。「節音調」というのは、文字通り節を単位として音調域が具現されるという前提での名称であろう。しかし場合によっては、節より短い単位で音調が具現されることもある。極端に言えば、考えながら話している場合は語ずつ間を置きながらとなり、一語が一つの音調域をなすということも必然であろう。パラトーンの例として国会の委員会審議で発言された発話を挙げるが、一続きの節において幾つかの短い沈黙（0.1あるいは0.2秒）によって音調域が区別される。

日本語の節音調体系において主音調という範疇を立てるべきか否か、ここで簡単に考察しておきたい。英語では語彙が強弱アクセントであるため、節においても主音調の置かれる語あるいは脚と弱い語・脚の区別は重要である。節においては強弱の交替が英語特有のリズムを形成する。他方で日本語は、語アクセントやリズム体系が異なる。語彙アクセントが高低によって弁別されることに加えて、節単位で見てもほぼ等しい強さで拍が等間隔に発せられるリズムを刻む。「ぼんぼりに　はっしと当たる　木の実かな」という小林一茶の句を例に採ってみよう。筆者の方言（兵庫県播州方言）に基づくピッチと拍を表してみると、次のようになる。白丸は黙拍を示している。黒丸の大きさが同一であるのは、この一句を通じて全ての拍がほぼ同様の強さであることを示す。

(3)



俳句という定型詩を音読する場合、中七字の前後に黙拍を置いて調子を整えるという特殊事情はあるにしても、典型的な日本語のリズムを示しているであろう。

このリズム型を見ていると、日本語に主音調という範疇あるいは概念を導入すべきか否か、疑問に思う。しかしながら以下の第三節で「そうですか」という発話を観察していると逆に、主音調によって「そうですか」という節全体に示される話者の心的姿勢が明確になるように考えられる。結論として、日本語に主音調という範疇あるいは概念を置く方が分析には好ましいと考える。

以下の節では順次、三つのメタ機能に即して日本語の節音調について考察を進める。

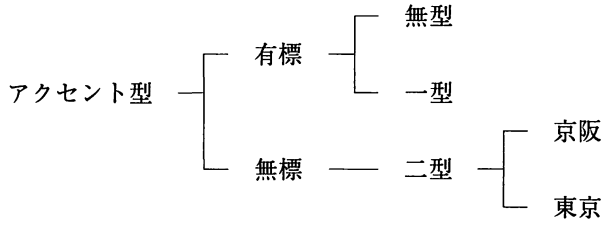
2．観念構成メタ機能

Kadooka（2006）では英語においてメタ機能別に節音調の意味機能を分析したが、日本語についても同様にして議論を進める。まずは観念構成に関する分析を行う。

日本語は声調言語ではなく、語アクセントは多くの主要方言においては高（H）・低（L）で区別される。日本語語彙文法層において、語の弁別という最も重要な機能を担う語アクセント体系が突出していると考えられる。ここで「突出した」と表現したのは、学問体系として成立しているか否かという観点に立っている。日本語の語アクセント体系は、方言研究を含めて国語学の伝統に位置付けられている（例えば、金田一（1991））。それに対して節音調の研究は、例えば標準日本語の節音調は何種類あるかという基本的問いに対しても定説を持っていないように見える。言い換えれば日本語研究において、音韻面での位置づけでは語彙アクセントは音素論などと並んで上位にあるが節音調は体系立っていないとしておく。

日本語の主要方言はアクセント型という観点から、次のように分類するのが妥当であろう。

(4)



無型アクセントと一型アクセントは、数点において有標である。第一に、歴史的にこれら型の方言が話される地方が政治や文化の中心になったことはなかった。第二に、話者人口が相対的に少ない。無型アクセント方言は九州中南部と北関東に分布するが、高低ピッチが語の区別において弁別的でない。一型アクセントで、宮崎県都城方言を例に採ってみよう。同方言では、アクセントは常に語の最終拍に置かれる。無標である二型アクセントは次の段落で検証する。

では二型アクセントの代表的な二方言で、日本語の語彙高低ピッチについて実例を見てみよ

う。東京方言の例は『新明解国語辞典』から、京阪方言は牧村（1984）[3]を参照した。

（5）	一拍				二拍				「花」	
東京方言	/ha/	L	/ki/	H	/eda/	LH	/miki/	HL	/hana/	LH
京阪方言	/ha˘/	HL	/ki˘/	LH	/eda/	HH	/miki/	HL	/hana/	HL

	三拍							
東京方言	/sumire/	LHH	/otiba/	HLL	/tutuzi/	LHL	/tubomi/	LHH
京阪方言	/sumire/	HHH	/otiba/	HLL	/tutuzi/	HHL	/tubomi/	LHL/HHH

	四拍	/kare-eda/	/taNpopo/	/himawari/	/matukasa/	/kusakari/
東京方言		LHHH	HLLL	LHLL	LHHL	LHHH
京阪方言		HHHH	HLLL	LHLL	LHHL	HHHL

	五拍	/satuma-imo/	/tyuuriQpu/	/goyoo-matu/	/yama-zakura/	/karasu-mugi/
東京方言		LHHHH	HLLLL	LHLLL	LHHLL	LHHHL
京阪方言		HHHHH	HLLLL	HHLLL	HHHLL	LLHLL

東京方言二拍語「枝、花」はいずれも低－高という型で、語単独では区別が付かないような外観を呈している。しかし助詞「が」が後続する場合、「枝が」では「が」が高で具現されるのに対して「花が」の「が」は低である。このように後続の助詞によって区別される場合を含めれば一拍語には二通り、二拍語には三通りというようにｎ拍語には（ｎ＋１）通りのアクセント型を区別するという一般則を立てることができる。これが日本語の語彙文法における最も重要な規則であると仮定する。京阪方言一拍語「葉、木」がそれぞれ高低、低高と表示されているのは、同方言では一拍語を一拍半に母音を長化する傾向があり、その二拍目を表すためである。東京方言ほか、全国各地の方言でも同様の傾向が観察される。しかし京阪方言では極端であるため、とくにこのように表示した。

（5）において、東京方言と京阪方言で高低が逆になる例が見られた。「花」や「躑躅」の一拍目などである。次に、このような差異が顕著に見られる二・三拍語で、この両方言の差異を観察しておこう。

（6）	/ame/	京阪方言：	LH	*rain*	HH	*candy*	
		東京方言：	HL	*rain*	LH	*candy*	
（7）	/arai/	京阪方言：	HHH	*washing*（noun）	HLL	*coarse*（adjective）	
		東京方言：	LHH	*washing*	LHL	*coarse*	

高低の型が正反対になっているのが「雨」、一部分入れ替わっているのが「飴、洗い、粗」である。

次に、脚列配分と音調域配分に関わる例を検証する。次の例を見てみよう。

(8) a. // 母は　死んで　いない //
b. // 母は　死んで / いない //

(a) では話者の母親は生きているが、(b) では幽明境を異にする。このように正反対の観念構成的差をもたらすのは脚列配分である。(a) では全体にかかる陳述「いない」は「死んで」を否定している。対して (b) では「いない」が独立して、「この世にいない」状態を含意する。つまり「死んで」と「いない」が並列結合の関係にあり、この節には述部が並立していることになる。

Abe (1998: 363-364) から、脚列配分に関する例を引用する。左側がAbe (1998) による表記、右側に選択体系流の表記と日本語を付け加えた。

(9) a. sonokaki irógaii　　// sono kaki / iro ga ii //
[⇑ ↓ ↑>⇓]　　「その柿、色が良い」
b. sono kakiirogaíi　　// sono / kakiiro ga ii //
[⇑ ↓ ↑ > ⇓]　　「その柿色が良い」

(a) では「その柿」の後に短い黙拍が挟まれ、これが主語だということを示す。文語的、あるいは改まった場での発話であれば「その柿ハ、色が良い」というように助詞「は」が必要と感じられるであろう。(b) は「その」の後に黙拍が入っても入らなくても、両様が可能なように思われる。いずれにしても「柿色」は一息に発せられなければならない。もし「その」の後に黙拍がないとすれば、「その柿色が良い」という発話は切れ目なしの一続きである。

東 (1997) にも音調域配分についての対比が研究されている。東京方言で次のような例である (23ページ)。

(10)　ナラデタオレタヨウジヲハコンダ
HLLLHLLHLLLLHHH　(アクセントパタンの聴覚印象)
(奈良で倒れた幼児を運んだ)
A.　[奈良で] [[[倒れた] 幼児を] 運んだ]
(「ナラデ」が「ハコンダ」を修飾する場合)
B.　[[[[奈良で] 倒れた] 幼児を] 運んだ]
(「ナラデ」が「タオレタ」を修飾する場合)

高低表記で明らかなように、(A) (B) 両様とも音調型は同一である。唯一の差異は脚列配分である。(A) は脚が二つ、(B) は一つである。これで既に差異は明らかであるが、「ナラデ」が修飾する語においても差異が生じている。

同じく東 (1997：30ff) で、「近畿方言」発話者による統語的曖昧文の例が挙げられている。(c)「多持院」というのは、架空の寺院名である。

(11) a. オショクジケン
L L LHLL
意味1：汚職事件　　意味2：御食事券
[[汚職] 事件]　　[[御食事] 券]

b. ヨビコウセイ
LLHLLL
意味1：予備構成　　意味2：予備校生
[[予備] 構成]　　[[予備校] 生]

c. アレタジインヤ
HLLHLLL
意味1：あれ、多持院や　　意味2：荒れた寺院や
[あれ] [多持院や]　　[[荒れた] 寺院や]

d. マユミトドケテン
HHHHHLLL
意味1：まゆみ届けてん　　意味2：まゆみと退けてん
[[まゆみ] 届けてん]　　[[まゆみと] 退けてん]

これら四組は、語彙の高低型まで全く同じであるが脚列配分で多義性が分かれている。脚列配分は［ ］で示されている。この四組に脚列配分で最小対立による以外、語彙文法層での共通点はない。四組の中では、（a，b）は複合語、（c，d）は節という差異がある。（c）で「多持院」という架空の寺院名が登場しているが、それ以外（a，b，d）は日常会話でも聞かれそうな単語連続から成り立っている。（d）の「まゆみ」という固有名は、三拍の女性名に限らず汎用性を持って代替することができるであろう。例えば「治郎兵衛」（LHHL）という四拍男性名でも、（d）と同様の最小対立を作ることが可能である。そしてこのような多義性は脚列配分という微妙な差異によって成立するため、日常生活においては聞き間違えの元凶であろう。

最後に、音調域配列に関わる例を考察する。一般的に日本語は語彙層においては、強弱よりも高低が弁別的である。しかし音調域配分においては、主として卓立を置く語によって話者が強調したい語が示される。キャンベル（1997：56）に、次のような例が挙げられている。下線は主音調脚を示す。

(12) a. （「誰の本」という問いに対して）　田中さんの本
b. （「田中さんの辞書ですか」という問いに対して）　田中さんの本

この例でわかるように、日本語において対比を強調するために音調域配分が機能している。主語と述部を備えた「完全な節」ではないながら二つの脚のうち、どちらに卓立を置くかで話者の意図が変わってくる。「田中さんの」を強調すれば、誰の本を指しているかという対比が示されることになる。「本」を強調すれば、書籍の類にあって雑誌や辞書ではなく「本である」と示すことになる。

日本語では強弱がこのように弁別的に機能するのは、音調域配分のみであると考えられるで

あろうか。これは語彙アクセントが高低によって弁別されるという韻律上の特性から帰結する必然であるように思われる。

3．対人的メタ機能

対人的メタ機能において最も重要かつ特徴的なのは心的姿勢である。これは観念構成としての発話－－これ自体は語彙文法層に属する－－に微妙な意味合いを含意させる手段として、英語においては多彩な機能を担っていたことが明らかである（Halliday 1994など）。この節では、このような英語節音調体系の意味機能と比較して、日本語節音調が心的姿勢においてどのような役割を果たすのかを分析する。

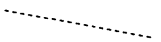
対人的メタ機能に関わっては、叙法（Mood）もまた重要な機能である。節末が上昇調であれば、話し手が聞き手に対してなにか情報を求めているように感じられるというのは言語を横断して普遍的であると考えられる。叙法についても本節で考察する。

・心的姿勢

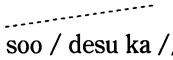
心的姿勢に関連した先行研究としては音声文法研究会編『文法と音声』シリーズⅠ～Ⅴ（1997, 1999, 2001, 2004, 2006）が、最も広範に集められた論文集である。しかしこれらは論文集としての限界がある。それは複数寄稿者の学問的背景が一様ではないために、節音調について一つの体系を構成していないという一点に尽きる。そのように複数の理論的枠組みが混在する中では、キャンベル（1997）に本書の方向と最も広範に共通性が認められる。

ここでは日本語の相槌表現「そうですか」において、選択体系理論の英語節音調を応用した例をKadooka（2004: 393）から引用して考察を加える。以下に、筆者の観察に基づく音調曲線を附して掲げる。

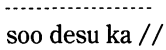
(13)



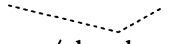
//1 soo / desu ka //　下降調：無標の相槌



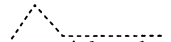
//2 soo / desu ka //　上昇調：話者の疑念を示す



//3 soo desu ka //　平坦調：気のない相槌、無関心



//4 soo / desu kaa //　下降－上昇調：強い疑念を示唆する



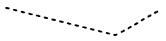
//5 sooo / desu ka //　上昇－下降調：強い断定を表す

偶然かもしれないが、五種類の節音調によって伝えられる心的姿勢は英語とよく一致している。相槌として無標の音調型は、第一音調であろう。節末が上昇調となる第二・第四音調では主音調は助詞「か」に置かれるが、それ以外では節頭の「そう」が主音調脚である。第三音調は話者の無関心を表す、気のない相槌である。この発話では全体を一脚と見なす。第五音調は、やや芝居がかった大袈裟な抑揚である。主音調脚の「そう」を、母音長化によって特に強調する

ように表記した。

このようにこの例だけを対象とすれば日本語にも英語に近い節音調変種があり、心的姿勢も英語と同様に音調によって示されるという結論に至りそうである。しかしながら、この例が直ちに日本語の節音調機能全般について敷衍できるか否かは大いに検討の余地がありそうである。そういうように慎重を期さねばならない最大の理由は「そうですか」というのが相槌表現であり、相手の発言を受けた後でしか発することができないという制約を受けている。第二点は第四音調：下降－上昇調の存在について、音声コーパスでその存在を確認するなどして厳密な検証を加える必要がありそうだと考えている。仮に次のような音調で実現されていれば、自然な発話に近いであろう。

(14)



そうですかぁ？

第二音調との差は、第二音調が低位から徐々に上昇していくのに対して第四音調は一度下降してから上昇するという点である。第四音調はこのように複雑な動きをすることによって、第二音調で示されるよりも強い疑念を表すことになる。

複合音調四と五は更に厳密に検証する必要があるとして、第一～三音調は日本語において確実に見い出される型である。以下にその意味機能を総括する。

(15)　第一音調：陳述、断定　　第二音調：質問、疑念　　第三音調：後続、無関心

第四音調と第五音調を比べてみると、後者の方が日本語における存在が疑わしい。第四音調は第二音調の変種として、強い疑念を表明する際に表れる蓋然性が高そうに思われる。

もう一つ、やはり相手の一言目を受けて問い返す「なに」という発話について音調と心的姿勢の関連を探っておこう。(13) と同じように、英語の節音調に準じて五通りの単純音調を当てはめてみる。

(16)　第一音調　「なに」　　(無標、「なにかあったの」というように尋ねる調子；比較的近しい間柄または目下の者に対して)
　　第二音調　「なに？」　　(「どうしたの」というように易しく問う調子)
　　第三音調　「なに...」　　(なにかに没頭しているところを邪魔をされたような場面；話者の無関心)
　　第四音調　「なにー？」　　(予想外の事態に驚いて、問い返しているいる状況)
　　第五音調　「なーに...」　　(「心配要らないよ」というように安心させる場面)

この表記では疑問符や母音長化という正書法の助けを借りて、音調を想像させるような効果を出している。このうち第一から第五音調までの例で、第五音調だけは発せられる状況が他と異なっている。まず、この第五音調による「なーに」の後には、例えば「そんなこと心配しなくとも良い」というような話しが続かなければならない。「なーに...」というのは、相手に安心を与えるための説得的な調子である。第一～第四音調は「なに」一言だけで単独の発話として

成立するのと対照的である。表す意味合いは基本的に上掲（15）などに近い。

ここで日本語の節音調を体系的に捉えた先行研究のうち、小山（1997）が分析した音調型を見てみよう（99ページ）。

(17)　〈A〉　降昇調：問いかけ
　　〈B〉　昇調：注意喚起、呼びかけ
　　〈C〉　降調：言い切り
　　〈D〉　昇降調：注意喚起・呼びかけ＋感情の

まず指摘しておきたいのは、平坦調が挙げられていない点である。もしも平坦調がここに加えられていれば日本語節音調の型は全体が五種類となり、（13）や（16）と完全に一致する。次に、降昇調＾昇調＾降調＾昇降調の順序に並んでいる理由である。（13）や（16）においては英語の順序をそのまま準用したが、第一から第五までは基本的に日常会話で見られる各音調型の頻度に基づいて並べられている。但し、平坦調の第三音調は上昇調：第二音調よりも頻度は多い。しかし極性で肯定と否定を対比させるために、頻度においてはより有標である上昇調を第二音調にしたと考えられる。

小山（1997）で総括されている日本語の各音調型と、選択体系理論での英語節音調機能を対照してみると次の表のように纏められよう。

(18)

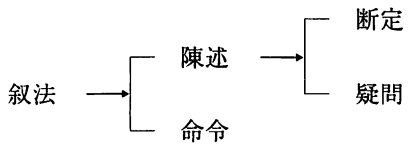
型	英語	日本語
下降	平叙文、WH-疑問	言い切り
上昇	極性疑問	注意喚起、呼びかけ
下降－上昇	話し手に対する強い疑念	問いかけ
上昇－下降	話し手による強い断定	注意喚起、呼びかけ＋感情の

先に指摘したように、日本語に平坦調を認めていないのは不適切であろう。また、個々の音調型について叙法との関わりなどもここでは検討しない。まとめは別に節を設けて論じることとする。

・叙法

日本語における叙法の体系を、英語に準じて次のように仮定する。

(19)



節音調が関わるのはこのうち、陳述での断定－疑問と命令－疑問の区別についてである。例を挙げる。

(20)　a．　これ、本。(下降調) ：断定
　　b．　これ、本？ (上昇調) ：疑問
　　c．　これ、読むの。(下降調) ：命令
　　d．　これ、読むの？ (上昇調) ：疑問

(a) と (b) が陳述における断定と疑問の区別、(c) と (d) が命令－疑問の区別に関わっている。この二組で、上昇調は疑問を示すという点で共通している。下降調は、断定と命令の双方において無標の音調である。これら四例は、話し手と聞き手が親しい間柄であることを前提とした常態（である調）で発せられている。これを丁寧態にしてみると、次のように語彙文法面で変化が生じる。

(21)　a．　これ、本です。(下降調) ：断定
　　b．　これ、本ですか。(上昇調) ：疑問
　　b'．？これ、本です？ (上昇調) ：疑問
　　c．　これ、読みなさい。(下降調) ：命令
　　d．　これ、読むのですか。(上昇調) ：疑問

常態では「だ (よ)」を省略しているので (20a) のように名詞止めになるが、丁寧態は「です」を省略することができない。ここにおいて、(21) では (a, b) のように終助詞「か」の有無で差が生じている。(b') では終助詞「か」なしで、その分不自然という判断を付けた。(c, d) においては、語彙文法の差が拡大している。命令節 (c) は「読みなさい」、疑問節 (d) は「読むのですか」と (20) よりも語彙文法上で乖離が大きくなっている。

このように、日本語においても節音調は叙法に大きく関わっていることが明らかである。

・まとめ

結論としては、日本語節音調の機能は心的姿勢において一定程度の役割を果たしているものと判断する。但し英語と比較して同程度に多様、また自由自在に話者の対人的ニュアンスを盛り込めるとは考えられない。叙法は英語とほぼ同様に、平叙法（叙述法）－極性疑問、命令法－極性疑問の区別があることが確認された。

4．テクスト形成メタ機能

この節では、日本語節音調がどのようなテクスト形成メタ機能を持つかを考察する。主としてパラトーンを扱うことになる。加えて後半では、音調連続と音調一致について分析する。音調一致は日本語において英語と同様に機能すると考えにくい。音調連続は、従属結合において日本語と英語で類似点が認められる。

4．1　パラトーン

パラトーンとは、英語における節音調研究の中で「発見」されたという経緯がある (Tench

1996, Wennerstrom 2001)。本節ではこの定義に沿った日本語の実例について考察する。

次の例は、国会での予算委員会審議における質疑応答である[4]。2002年２月12日、衆議院予算委員会において麻生太郎委員（当時）が遠山敦子・文部科学大臣（当時）に質問を向ける前後の行である。音調表記は、日本語表記する点を除いてWennerstrom（2001）に従う。

(22)　行

1　この点について→
2　重ねて→
3　ご努力、ご尽力を↗
4　お願いいたします。↓（1.0）
5　⇮そこで次に↘
6　教育について↘
7　遠山大臣に→
8　伺いたいと思います。↓

凡例　→：平坦調　↗：低上昇調　↓：下降調　↘：低下降調　⇮：高パラトーン
（1.0）：1.0秒の断絶

「高パラトーン」(high paratone) とは、話題転換の折りに旧話題の終端にかけては話者が調子を落とし、新話題を一際高い調子で切り出す現象を指す。この例においては、第一～第四行が旧話題であり、低い音調に押さえられている。第五行で話題を転換すると共に質問相手を替えている。そこで第五行の冒頭に高パラトーンを無意識に用いて、話題の転換を聞き手に訴えようとしている。このように高パラトーンは複数の話題に跨るので、長い範囲に及ぶ音調現象である。新・旧話題の転換を画すという点において、テクスト形成の重要な機能を担っていると考えられる

次に低パラトーンの例である。低パラトーンとは、本来の話題から一時的に逸脱することを示唆する目印である。(22) と同じく2002年２月12日衆議院予算委員会での審議、当時の自由党議員であった西川太一郎委員の質問である。

(23)　行

1　そういう実態が→
2　⇩私は与党ですよ↗
3　私は野党みたいに勘違いされると困るけど↘
4　与党だ（0.2）↘
5　⇮与党でもですね（0.1）→
6　これは（0.1）→
7　私はですね、やっぱり（0.1）↘
8　しっかりやっていただかなくては困ると思うんです。↘

凡例　⇩：低パラトーン

一行目の「そういう実態が」は節全体の主語とする意図で切り出されたのであるが、すぐさま

二行目で本来の話題から逸脱を開始する。西川議員は当時、連立与党を組んでいた自由党所属であった（自由党は後に自由民主党に合流した）が、所属議員が少数であって知名度が低いことを自覚していたためか、自由党が与党であることを強調するという挙に出た。二行目から五行目にかけて「野党ではない、与党だ」と繰り返している。五行目から七行目にかけては、口語独特の冗長さが端的に観察される。五行目の冒頭では高パラトーンも観察される。これは(22) における話題の転換とは多少異なり、「自分は連立与党の一員であるけれども」と念押しするような効果を狙っている。六行目の「これは」は一行目の主語を想起させる機能を兼ねているが、最終的に八行目で受けられる。全体としてこの八行は「そういう実態はしっかり対処してもらわなくては困る」と一言で片付けられるが、「自分が野党議員だと勘違いされると困る」という脱線を挟んで、本筋から逸脱した冗語が多い。低パラトーンはこのように、一続きの節に途中で脱線した話題を挟み込むに際して有効な目印として機能する。高パラトーンと異なるのは、低パラトーンは一発話内部で完結するものという点であろう。脱線が長くなることも往々にしてあるが、話者はいずれ本題に復帰するという意図の元に逸脱を始める。脱線を開始する折に低パラトーンによってそれを暗示するのと同様に、本題復帰に際してもそれを示す手段が必要である。話し手にとっても聞き手にとっても本題・脱線のいずれかが話題になるのか、脳内での処理が必要であろう。(23) では、七行目末で0.1秒の沈黙がその時間に充てられていると考えられる。

4．2　音調連続

口語英語では、音調が発話全体にわたってテクスト形成メタ機能について重要な役割を果たしている。日本語では、どう作用しているであろうか。ここではまず、音調連続から考察する。

英語の音調連続には１－１，３－１，４－１と三通りある（Halliday (1994)）。それぞれ結束性、並立結合、従属結合という役割分担が認められている。ここでは、これら英語の例を日本語に置き換えて分析を行う。

日本語の分析に先立ち、英語の音調連続の例を振り返っておこう。音調連続１－１、３－１、４－１はそれぞれ次のような例であった。

(24)　Jane: //4 I'd like /1 sherry / please /1 medium dry //

(25)　Waiter: //1 certainly sir //1- no / trouble at / all sir...
//3 ^ I'll be back in a / moment sir to //1 take your / order / ^ //

(26)　Jane: //4 ^ yes I'm / not / usually af/fected by / thing //1- still //1- ^ I / think I'll / have / pineapple / juice //

英語における選択体系理論での分析では、単純音調が五種類と考えられている。二つの音調域が連続する場合、25通りの組み合わせができる。この中で上掲の三通りだけを「音調連続」として、言わば特別扱いしているのである。このような特別扱いが、そのまま日本語に準用されるとは考えられない。日本語では、作例で検証してみる。

まず１－１という型は無標である第一音調が連続するので、特別な意味があることを見過ご

してしまう可能性が考えられる。(24) と似たような状況を作り出してみよう。

(27)　//1 シェリーをお願い　//1 ミディアム・ドライで //

この発話においては1－1という音調型は自然であろう。しかし余りにも自然すぎて、これを音調連続として他と区別することが適切か否か判断しかねる。ここでは、1－1という音調型を日本語における音調連続と位置付けることについては保留する。

次に3－1であるが、英語の音調連続 (25) をそのまま日本語に置き換えても不自然であるからここでは (22) から次の箇所を抽出してみる。

(28)　//3 遠山大臣に　//1 伺いたいと思います //

これは (22) の七行目と八行目を、表記法を変えて抽出したものである。日常会話ならば、この程度の長さは一音調域で言い切ってしまうと考えられる。委員会とは言え国会質問という改まった場であるから、このように二つの音調域に区切られているように考えられる。平坦調は予算委員会質問の断片 (22) と (23) でも観察されたように、談話中にかなりの頻度で出現する。その頻度からすれば、直後に下降調が続いて3－1という連続になることもまた高頻度が想定される。問題は、この3－1という連続をどのように位置付けるかであろう。英語では、3－1を並立結合として機能する音調連続と範疇立てた。しかし日本語では談話途中の平坦調は後にまだなにか続くことを示唆する調子であり、並立結合と分類するのには無理があろう。

最後に4－1という型であるが、日本語には下降－上昇調が単一の音調域に実現されているこの型は極めて少ない。上掲 (14) のように作例としてなら創出できるが、音声データベースがあったとしても、そこから検索して実例として見出せるか否か定かではない。次のように例を創出してみた。

(29)　//4 読むの　//1 これ //

これは叙法についての例で (20) の「これ、読むの？」を参考として、語順を倒置にした作例である。「読むの」を下降－上昇調にすれば、強い抗議の意思表示となる。英語では音調連続4－1は従属結合と定義されているが、日本語では仮に同じ型で音調連続という範疇を立てるとしても機能は異なりそうである。全体的な結論としては、4－1という音調連続を日本語で仮定することはないとした方が妥当であろう。

以上、英語で想定されている音調連続1－1，3－1，4－1を仮に日本語に適用してみた。日本語においても1－1と3－1は、このような順序で談話中に音調が見出されることは充分予想できる。しかしこれら二つにしても、英語と同様に音調連続という範疇で括るか否かは別問題であろう。4－1という連続の型は、大規模な音声データベースによって実在を確認するまで存在するか否かそのものを保留する。

4．3　音調一致

音調一致も音調連続と同じく、英語の例を参考にして考察する。Halliday （1994: 306）から音調一致の例を引用する。

(30)　a. //1 where's my / green **hàt** the //1 one with / two little / **feàthers** //
　　b. //2 have you / seen my / green / **hát** the //2 one with / two little / **feáthers** //
　　c. //4 ^ if you / see my / green **hăt** the / one with / two little / **feăthers** //1 let me / **knòw** //

（a，b，c）それぞれにおいて「帽子」(hat) と「羽根」(feathers) は主音調が置かれ、同じ音調で実現されている。（a）では第一、（b）では第二、（c）では第四音調である。つまり「私の緑の帽子」が「羽根が二枚付いた」と同格であるという文法的関係を、音調一致という音韻現象で示している。

これを日本語に置き換えてみよう。音調は附さず、脚列境界なども表示しないで表記しておく。

(31)　a．緑色の帽子はどこ、小さな羽根が二枚付いたのだけど。
　　b．緑色の帽子を見なかった？小さな羽根が二枚付いたの。
　　c．もし私の緑色の帽子を見かけたら－－小さな羽根が二枚付いてるのだけど－－教えてね。
　　c'．もし私の緑色の帽子を見かけたら、教えてね。小さな羽根が二枚付いてるのだけど。

日本語での語彙文法では、常態と敬態でかなり異なる。(31) では常態で通してみた。（a）の「どこ」は、単独では高－低というアクセント型であろう。この例では、第四音調に近い節音調なっていると考えられる。後半は、「帽子」と同格であることを示すために第三音調が自然であろう。英語では前半・後半ともに第一音調で統一されていたが、日本語では第四－第三音調で全く一致は見られないということになる。

（b）では、前半が疑問節で「見なかった？」と上昇調（第二音調）である。後半は（a）と節末を変え、「付いたの」と体言止めにしてみた。「の」で終わると、下降調（第一音調）である。英語と同じように音調一致が見られたとすると、「羽根が二枚付いたの？」と後半も第二音調になるが、これは不自然である。相手に対して、自分の帽子に羽根が二枚付いているか尋ねることになると意図されるからである。従って、この場合も音調一致は生じないと判断する。仮に後半を（a）と同じ「羽根が二枚付いたのだけど」としても、この部分は第三音調であるから音調一致ではない。

（c）は語順を英語版と揃えようとしたので、日本語としては変則的である。（c'）のように、同格句は補足として後ろに付け足す方が自然であろう。（c）は「教えてね」が独立した音調脚となり、全体で三つの音調脚を持つ。「もし...見かけたら」が第一音調、「小さな羽根が二枚付いてるのだけど」も第一音調、しかし「教えてね」はやや上昇調（第二音調）である。

（c'）は音調脚が二つと分析すべきであろう。「もし、...教えてね」はゆっくり話せば音調脚二つになるかもしれないが、自然な早さであれば一音調脚で具現される。ここでは句点で切って、前半と後半を別個の節と分析している。「教えてね」という節末は、やや上昇調になるのが自然であるように思われる。独立した節となっている後半は第一音調である。やはり音調一致は見られない。

全体の結論として、日本語には音調一致は見られないと判断しておく。(31) では（c'）を含めて四例で考察したが、音調一致らしい現象は見られなかった。この理由は次のように考えられる。日本語においては、節に固有の音調が強いので同格節であるからといって音調を揃えることはできない。例えば「どこ」と尋ねる節は第一、上掲（a）のように直後に後続する節があれば第四、「教えてね」は第二音調、というように叙法によって固有の音調が定まっている。

5．まとめ

この小論では、日本語の節音調についてメタ機能毎に考察を進めてきた。ここでの結果を次のようにメタ機能と層で両軸に取って表に纏める。音韻と音声は、この両層の区別について別に考えたいので空白としておく。

(32)

	観念構成	対人	テクスト形成
意味	脚列配分 音調域配分	心的姿勢	パラトーン
語彙文法	語彙アクセント		
音韻			
音声			

日本語においては、節音調よりも高低による語彙アクセントの方が重要であると判断する。英語のように、心的姿勢（対人メタ機能）や音調一致・音調連続（ともにテクスト形成メタ機能）が幅をきかせるのと対照的である。日本語でも五種類の節音調を仮定する。もしこれら五種類の節音調が確認されれば、英語の単純音調五種類と対応していると考えられる。テクスト形成メタ機能において唯一、日本語でも英語と同様に機能が認められるのがパラトーンである。音調一致は存在しない。音調連続は、ここでは判断を保留した。音調連続について考察するには、より多くの実例から結論を帰納する必要があろう。

註

*1　この位置に立つ子音は、原則として後続する音節の語頭子音が促音として実現される。例外は「あっ」という感動詞のような独立語で、節末に位置する発話のような場合である。

*2　ここでは、/ptksh/五種類の阻碍音が一括して合算されている。

*3　牧村（1984）には、以下の語彙項目が見出しに並んでいない。これら語の京阪方言アクセント型は筆者が判断した。

「枝、幹、菫、躑躅、蕾、松笠、草刈り、薩摩芋、チューリップ、五葉松、山桜」

*4　これら例はKadooka (2004b)からの再録であるが、ローマ字表記から日本語表記へと改編している。

参照文献

Daneš, František. (ed.) (1974) *Papers on Functional Sentence Perspective.* The Hague: Mouton.

Halliday, M.A.K. (1967) *Intonation and Grammar in British English.* The Hague: Mouton.

Halliday, M.A.K. (1970) *A Course in Spoken English: Intonation.* London: Oxford University Press.

Halliday, M.A.K. (1973) *Explorations in the Functions of Language.* London: Edward Arnold.

Halliday, M.A.K. (1974) "The Place of 'Functional Sentence Perspective' in the System of Linguistic Des-cription." in Daneš(ed.).

Halliday, M.A.K. (1979) "Modes of Meaning and Modes of Expressions." reprinted in Halliday (2002).

Halliday, M.A.K. (1985) *An Introduction to Functional Grammar.* (first edition) London: Edward Arnold.

Halliday, M.A.K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar.* (second edition) London: Edward Arnold.

Halliday, M.A.K. (2002) *On Grammar.* London: Continuum.

Halliday, M.A.K. (2004) *An Introduction to Functional Grammar.* (third edition, revised by Christian M.I.M. Matthiessen) London: Arnold.

Hirst, Daniel. and Albert Di Cristo. (eds.) (1998) *Intonation Systems: A Survey of Twenty Languages.* Cambridge University Press, Cambridge.

Kadooka, Ken-Ichi. (2001) "A Note on the Interpersonal-Nuance Carriers in Japanese." in *JASFL Occasional Papers.* Vol. 2. pp. 17 - 28.

Kadooka, Ken-Ichi. (2003) "A Systemic Analysis of the Intonation System of English." in *Ryukoku Journal of Humanities and Sciences.* Vol. 24, No. 2.

Kadooka, Ken-Ichi. (2004a) "On the Multi-Layer Structure of Metafunctions." in *JASFL Occasional Papers.* Vol. 3. pp. 43 - 62.

Kadooka, Ken-Ichi. (2004b) "A Systemic Approach to the Typology of Functions in Intonation Systems." in *Festschrift for Professor Masayoshi Shibatani's Sixtieth Birthday.* Edited by Taro Kageyama and Hideki Kishimoto. Tokyo: Kurosio. pp. 389 - 404.

Kadooka, Ken-Ichi. (2006) "A Systemic Account on Strata and the Meaning of Intonation." in *Ryukoku Journal of Humanities and Sciences*. Vol. 27, No. 2. pp. 43 - 58.

Kadooka, Ken-Ichi. (2007) "A Note on the Division of the Japanese Dialects." in *Ryukoku Journal of Humanities and Sciences*. Vol. 29, No. 1pp. 157 - 173..

Tench, Paul. (ed.) (1992) *Studies in Systemic Phonology*. London: Pinter.

Tench, Paul. (1996) *The Intonation System of English*. London: Cassell.

Vance, Timothy. (1987) *An Introduction to Japanese Phonology*. Albany: State University of New York Press.

Wennerstrom, Ann. (2001) *The Music of Everyday Speech*. Oxford: Oxford University Press.

日本語文献

東　淳一（1997）「日本語の統語境界におけるF0とモーラ長のふるまいについて」音声文法研究会（編）所収。

音声文法研究会（編、1997）『文法と音声』東京：くろしお出版。

音声文法研究会（編、2001）『文法と音声Ⅲ』東京：くろしお出版。

キャンベル、ニック（1997）「プラグマティック・イントネーション」音声文法研究会（編）所収。

小山哲春（1997）「文末詞と文末イントネーション」音声文法研究会（編）所収。

山口　登、筧　壽雄（2001）『機能文法概説－ハリデー理論への誘い－』東京:くろしお出版。